〈文〉を通して〈人間性〉を探求し陶冶する

上智大学文学部は、〈文〉を研究することによって人間性を探求するとともに人間性を高める学問の場です。
2000人余りの学生が7つの学科で哲学、歴史、文学、ジャーナリズムなどを研究しています。

哲学科
体系的科目（形而上学、倫理学、美学、認識論、人間論）や哲学史（古代哲学史、中世哲学史、近代哲学史、現代哲学史）などで基礎を固め、演習や文献講読で、理解力、発想力、表現力を養います。さらに三つの系列（哲学思想・倫理学・芸術文化）を指標として研究テーマを模索し、卒業論文に取組むことで哲学を自分で実践できる力を養います。

史学科
アジア・日本史系、ヨーロッパ・アメリカ史系のそれぞれの分野の教員を配置し、歴史学研究の基本から卒業論文の完成にいたるまで一貫指導します。初年時から研究入門講義・演習を設け、少人数編成のもと、「歴史学」を学ぶことで培われる批判的分析力や世界の多元的理解を通じて、長期的・国際的な視野を養います。

国文学科
日本文化研究の中核を担う学科として、人間・社会・文化の本質を問う視点を養うとともに、国際化の中で日本文化を問い直し、世界に発信しうる学殖と見識の獲得をめざしています。そのために、国文学・国語学・漢文学それぞれの専門性を高めるとともに、それらの有機的関連を重視したカリキュラムを編成しています。

英文学科
国際語としての英語を学び、考察力と発信力を培う学科です。英語圏の文学作品、言語、および英語教育に関する学びを通じて、知識を自由闊達に活用する「真の国際人」となるための教育を行います。ICT を活用した語学授業、少人数の演習、多彩な講義、綿密な卒業論文指導によって、不確かな時代を生き抜くための確かな知性を作り上げていきます。

ドイツ文学科
EU、環境政策からサッカー中継まで、欧米生活のさまざまな局面で語られている〈言葉〉は、古今のドイツ語の達人たちにささえられています。私たちの学科では、実践的なドイツ語力を身につけるだけでなく、ヨーロッパ的〈知〉の根幹をなすドイツの言語芸術を歴史的に探究することで、現代の多様な社会・文化現象をより深く理解する力を養います。

フランス文学科
本学科では、まず徹底的にフランス語を身につけると同時に文学研究の基礎を学ぶことから始まります。そして文学を中心に、語学、文化の幅広い領域にわたる講義をとおして、何よりも「考える力」を養っていくのです。その集大成となるのが卒業論文です。4 年次までの一貫したプログラムに沿ってフランス文学科の教育はなされています。

新聞学科
新聞、放送、出版、映画、広告などマス・メディアはもとより、電気通信、インターネットなど、メディア・コミュニケーションの領域を対象に、それらが社会的にどういう役割を担い、どう機能し、どんな影響を与えているのかを「理論と実践」の両面から、バランスよく学びます。

文学部の知の広さと深さを実感する創造的な学びの場　文学部横断型人文学プログラム

上智大学文学部では、2015 年度より文学部横断型人文学プログラムを開講しています。「横断型」と呼ばれるのは、主に文学部の学生が学科の枠を超えて履修できる学部共通のクラスだから。人文学の視点をコアにして、専門の枠に縛られることなく自分の興味の幅を広げてみたい！という皆におすすめです。意欲をもった皆の参加を期待しています。

共通基礎科目
↓
個別選択科目
↓
プロジェクト・ゼミ

横断型人文学プログラムには
「身体・スポーツ文化論コース」
「芸術文化論コース」
「ジャパノロジー・コース」
の3つのコースがあります。
「共通基礎科目」をとりながら自分の興味を探ってコースをひとつに絞ったあと、それぞれのコースで指定されている「個別選択科目」と「プロジェクト・ゼミ」を履修し、全て取得した際には、「文学部横断型人文学プログラム修了認定証」が授与されます。

詳しくは《文学部オリジナルサイト》へ。 ▶▶▶ https://sophia-humanities.jp/

撮影：エラスムスの家、ブリュッセル

各学科の学生の声

一．学科を選んだきっかけは何ですか？

二．うちの学科のここがスゴイ！と思うところはどこですか？

三．学びを通して自分の中に起こった変化はありますか？

四．学びを今後の人生の中でどう活かしていきたいですか？

哲学科3年

中津 千晴
Chiharu Nakatsu

他者との対話を主とした授業で、偉人からも、友人からも、影響を受けられる。

一．学科を選んだきっかけ

正直あまり高尚な理由はなかったのですが、昔から思索に耽ることが好きだったので、哲学をやってみたいなという好奇心で選ばました。

二．うちの学科のここがスゴイ！

ディスカッション形式の授業が多く、他者と対話しながら考えてみたり、意見を交換し合ったりできるのはいいところだと思います。先生が学生から集めたリアクションペーパーに対してコメントし、学生がそれを聞いてまた考える、というような、学生と先生との対話が主になっている授業もあります。

二年生になると哲学思想、倫理、芸文の三つからコースを選ぶので、そこで自分の興味があることや、逆に自分からはやらないようなことを深めていくことができます。私自身は哲学思想のコースなのですが、幸福や愛といった倫理系にも興味があって、コースが違っても色々なことを広く勉強できたり、関心がなかったことでも自分の興味ある分野の土台になったり、そういう学び方ができると思います。

大学に入る前は、哲学科って抽象的な、生きるとは何かとかそういうことばかりを考えているのかなと思っていたのですが、その実わりと論理的というか、自己啓発みたいな考え方をするんじゃなくて、因果関係をロジカルに考えるという学び方をするのは意外なことでした。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

論理的な考え方を意識するようになったり、先人の考えを受け吸収して、自分ひとりでは学びなしに考えられなかったことや、自分のもっていた考えを、偉人にころ同じ考えの友人にしろ、影響を受けて発展させることができたり。考え方を昇華させる方法が増えたと思います。ディスカッションで他の人の考えを聞いて、対話する中でそういう変化が感じられました。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

哲学科は変わった人もいるんですけど（笑）本当に色んな人がいる中で刺激を受けて、色々な角度や視点から見た考え方ができるようになったので、それを活かして社会に貢献できたらと思います。今は多様性とか、厳しい目線がある世の中だからこそ、他者のことを考えながら仕事ができたらいいなと思います。

史学科3年

木村 帆花
Honoka Kimura

史学科の魅力は、卒論までの助走が長いこと。プレゼミで、早いうちから自分の興味分野を考える。

一．学科を選んだきっかけ

高校で世界史の授業が面白いと感じて、史学科が選択肢にあがりました。

歴史の魅力的だと思うところは、ダイナミックなところ。特に世界史は、国の思惑があり、世界を舞台にした勝負やゲームに見えたんです。そうした時代を動かす様ダイナミックさが面白いと思います。

二．うちの学科のここがスゴイ！

プレゼミだと思います。史学科では三、四年生のゼミの前段階として、二年生からプレゼミに入るのですが、卒論までの助走が長いことはいいところだなと、ゼミ生も基本的には二年生から四年生まで同じメンバーなので、みんながどういうことに興味があるかというお話もでき、早いうちから自分がどういう研究をしたいかを考えられるのはいいところだと思います。

また、高校生のときには中国史にそこまで関心はなかったのですが、史学科の先輩の中国史は、自分でもこんなに楽しいと思うほどは予想外でした。中国史は領域の範囲も広いので、高校ではそれを一本の線にまとめてざっくり勉強していましたが、大学では黄河周辺の自然環境に関する歴史など、先生方の専門に焦点を当て、一つのことについて深く見ていくのが楽しいと感じました。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

入学式の日に先生から、「史学科の学生は卒業する頃には疑い深くなる」と言われて、本当にそのとおりだなと思っていたんですが、本当にそのとおりだと思っていて、テレビのニュースやドラマ、映画などを見ているときに、これって本当なのかなとか、これは映画的な脚色なのかなとか、別の人の立場から見たこうすれば抜けてるな気がするとか、なりました。ひとつのことに対して色んな可能性を考えて見られるようになった気がします。

史学科は出典が厳しいんです。記録に残された文章を誰が書いているのかとか、その時代には読み書きできない人もたくさんいたのに、どうして載っているのかとか。書かれていることが本当に起きていたとも限らないし、書かれていないから起きてないとも限らない。そういうことを授業で練り返し教えられる中で、書かれていることだけがすべてではないと考えるようになりました。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

受け取った情報を鵜呑みにせず、他の立場のことを考えたり、ひとつのことに対して色々な角度や視点から可能性を考えたりすることは、これから先に活かせる力だなと思います。

将来は、仕事を支える仕事をしたいと思っています。様々な視点で考えることは、人の生活に密着したところで働く時にも活かせると思います。

フランス文学科3年

佐藤 愛由子
Ayuko Sato

文学を読むことで、フランスに住んでいた頃よりも感じた海外の人々への親近感。

一．学科を選んだきっかけ

高校生の頃に父の仕事の都合で三年ほどフランスに住んでいたのですが、全くフランス語が身につかなくて。最初の一年は日本人学校に行き、残りの二年はインターナショナルスクールに行っていて、フランス語の授業はあったんですけど、どうしても英語が強くなってしまって、ちゃんと勉強できる機会がなかったんです。なのでまた大学でフランス語を勉強したいと思って、フランス文学科を選びました。

二．うちの学科のここがスゴイ！

少人数クラスなので教授との距離が近くて、分からないときに気軽に質問ができ、勉強がやすい環境にあるのかなと思います。大学に入るまでは、教授って高校の先生とは違って厳格で少し近寄りがたいようなイメージを持っていたんですけど、どの先生方もみんなフレンドリーに接してくださるので、朗らかな雰囲気というのは、入学前の印象と変わったところです。

私は舞台に興味があって、舞台芸術の授業や戯曲を読む授業を取っています。小説と舞台芸術を比較する授業は、同じ題材でも演出の方法や役者が違うだけで印象がガラッと変わるので、そういった比較をするのが面白くて好きでした。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

フランスに住んでいたこともあって、海外の人と私たち日本人とで変わらないなって思うことは多々ありましたし、文学を読むことで、人間の感じ方は文化によって違いもありますけど、根本的なところでは国や時代を超えても変わらないなと分かりました。授業中にテクストを読んでいて、日常でこういうことあるよな、っていう類似性を見つけると、色々なものに対して親近感がわくというか、距離が近く感じられるようになってしまいました。海外の人や、自分とは違う環境にいる人について、より身近に感じるようになったというのが、私の中で起きた変化です。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

将来、仕事でフランス語を使うかどうかはまだ分かりませんが、様々な立場にいる人に親近感を覚えたり、テクスト間で類似性を見つけたりするという学びは、通じて、幅広い物事を見られるようになったと思うので、将来仕事をしていても、その力は役立つと思います。

英文学科3年

吉澤 理子
Riko Yoshizawa

大事な情報は読みにくい場所にある。SNSの時代だからこそ気づいたこと。

一．学科を選んだきっかけ

英語という学問の楽しさに気づいたきっかけは、中学生の時に通っていた塾でした。学校では教科書の内容を和訳するだけでしたが、塾では英語という言語に向きあって、文法の「なぜ？」と思うことを説明してもらえたので、構造として面白いなと思うことが増えたんです。英語のリズムの面白さや日本語との違いなど、辞書的な役割だけでなくもっと奥深いことまで見ていく楽しさを知り、英語が好きになりました。

二．うちの学科のここがスゴイ！

英語のプロになるための様々なアプローチが用意されていることです。私は教職課程を履修していますが、英語の教育方法の歴史の変遷や良い点、悪い点を見ていくことも、英語という言語を知るアプローチのひとつだと思います。

また、言語学としての英語を学ぶことができるのも強みです。高校までは文法の規則を覚えるだけでしたが、言語学系の授業では、文法構造をより深く理解でき、英語が歴史的にどのように変遷していったかを知ることができます。

三つ目が、文学作品からのアプローチ。作品を読んで、形式や言葉の意味、言葉の裏にある含意を深く読解していくことができます。歴史的背景や思想の流れを受けて作品ができたことや、他の文学作品と比較してという、文化的背景があるなど、文化的背景とからめて教えてもらえるのも良さだと思います。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

今までの勉強は、点数をとるため、受験に役立つための勉強が多かったのですが、大学では自分を豊かにし、自分の頭の中や価値観を育てることができました。

SNSなど簡単に手に入る情報が左右されている世の中ですが、大事な情報は読みにくい場所にあるのかなと思っていて、アクセスしづらかったり、読みにくかったり、日本語に訳されていないものを読んで楽しむことは、大学で得られた大事な価値観です。高校ではなぜ本を読むのかと思っていたが、本になっているということは、情報の価値が高いということ。「情報が溢れた社会の中で様々なものを本当にかどうか疑って調べる中で、批判的に考える力が身につきました。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

将来の職種に就くかはまだ決めていないのですが、もし教員になったら英語が苦手な子に楽しいと思ってもらえるような授業をしたい、英語の魅力を伝えたいですし、得意な子に対しても、大学で自分が得られたような、点数を取ることより英語を本当の意味で楽しむという感覚を持ってほしいです。

企業に就職しから、英語を使わない会社だとしても、情報の信憑性を自分で批判的に考えてから物事を理解する力は役立つと思います。情報が溢れている社会ですし、大人になればなるほど関わる人も増えていくので、色々なものを鵜呑みにするのではなく、正しいかどうかを自分で判断することが大切だと思います。

ドイツ文学科3年

増田 陽名
Hina Masuda

心に響いた先生の言葉、「ドイツ語は、あなたたちが初めて自分で選んだ言語」。

一．学科を選んだきっかけ

上智大学で外国語を学びたいと思ったときに、高校時代に世界史を学ぶ中でドイツに関する勉強が楽しいと感じていたので、ドイツ文学科を選びました。

二．うちの学科のここがスゴイ！

ドイツ語は全く学んだことがなかったので最初は不安だったのですが、最初の授業の時に、小松原先生が「ドイツ語はあなたたちが初めて選んだ言語だよ」と言ってくださって。「日本語は日本で生まれ育ったから自然と学ぶし、英語も校で強制的に勉強するものかもしれないけど、ドイツ語は初めて自分が選び取った言語だから、それ頑張ってみな？」と言っていただいて、その言葉がとても響きました。先生との距離が近くて、かつ雰囲もしやすいということ、学びを通して自分の中に起こった変化

もともと本を読むことは好きでしたが、ドイツ文学科に入って、ただ読むのではなく作品の背景や、ドイツ語の特性、とくにドイツ語は音が特徴的なので、音が持っているイメージやその言葉の意味、音による作品のイメージの変化など、深いところまで読むことをやってきました。なので自分実生活でも、ただ読むだけでなく、自分の中に置き換えたらどうなのかな、と深く考えられるようになってきたかなと思います。それを自分で考えて整理する癖や思考回路が身につけられたと思います。それは日本語で触れてきた文学をドイツ語で読み、先生のお話を聞いてさらに深められたからだと思います。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

文学って就職活動に直接結びつかないというイメージがあると思うんですけど、何かを深く考えることや、作品に触れて新しい考えを取り入れることって、自分がどう投えてどう行動するかに結びつけられるんじゃないかと思っています。これからドイツの作品に触れる機会は減ってしまうと思うのですが、ドイツに限らず日本語や他の言語のテクストを読んで、自分が感じたことやこれについて知ったことを改めて自分を考えたり、自分の気持ちを整理したりするときにはこの学びを活かしてくるとも思います。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

文学って、作品の背景や、ドイツ語の特性、とくにドイツ語は音が特徴的なので、音が持っているイメージやその言葉の意味、音による作品のイメージの変化など、深いところまで読むことをやってきました。なので自分実生活でも、ただ読むだけでなく、自分の中に置き換えたらどうなのかな、と深く考えられるようになってきたかなと思います。それを自分で考えて整理する癖や思考回路が身につけられたと思います。それは日本語で触れてきた文学をドイツ語で読み、先生のお話を聞いてさらに深められたからだと思います。

新聞学科3年

島田 遥
Haruka Shimada

被災地ボランティアをきっかけに興味を持ったメディア。自分の言葉で発信できる人に。

一．学科を選んだきっかけ

一番大きなきっかけは、高校二年生のときに被災地ボランティアで福島県を訪れた際に、被災者の方が、「メディアは復興について明るい部分を切り取って報道していること」が多いけれど、本当は被災者の心の部分は未だに復興していない、これは復旧だけで、復興ではない」と言っていらして。そのときに、当事者の意図とは違う形で報道される、ということを抱き、「メディアが人々に及ぼす影響や報道のあり方に興味を持って、新聞学科を選びました。

二．うちの学科のここがスゴイ！

理論と実践のどちらもできることが魅力です。理論面で言うと、「新聞学科って何をしてるの？新聞読んでるの？」とよく聞かれるのですが、もちろんジャーナリズムについて、国内、国外の報道の違いを分析したりするんですけど、それだけでなく映画、広告、広報、出版など、幅広い分野を深く学べることが面白いなと思っています。

実践の面では、地方局と同等レベルの設備が整ってるスタジオがあり、そこで一年生の必修としてテレビ番組を作る授業が行なわれます。テレビ番組制作の裏側を経験できる目玉授業だと思います。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

新聞学科の授業はグループワークやプレゼンがとても多くて、自分の考えが求められるのですが、その中で、自分の考えが人々に及ぼす影響や論理的に説明する力、主体性が身についたなと思っています。

あと、ジャーナリズムや出版、広告、広報など、頃の生活で触れる機会が多い分野だからこそ、学んだことが役立つのかなと思います。

テレビなどのメディアを通して自分が見たり聞いたりしたものは、自分が直接見たわけではないので、必ずしも正しいとは言い切れないと思うのですが、自分が見聞きしたことを自分の言葉で発信していくその結果、人々が新聞だったら、テレビだったら、と選択できるようなことができたら素晴らしいなと思います。

国文学科3年

菊岡 駿一郎
Shunichiro Kikuoka

多くの文章で溢れる社会の中、当たり前を疑って、自分の解釈を大切に。

一．学科を選んだきっかけ

僕が日本文学に興味を持ったきっかけは、高校時代におかった課題図書でした。指定された本を読むというカリキュラムで、幅広く色々な本を読むのは面白かったなと思いました。その中で日本の近代文学に惹かれ始めて、高校の卒業論文で宮沢賢治について書いてみたんです。様々なことを自分なりに調べて書いていなと思ましました。

特には上智大学の国文学科には様々な分野を経験されている先生がいらっしゃって、さらに少人数授業があるというのが印象的でした。なにから幅広くかつ深い学びができるのかなと感じたことがこの学科を選んだ理由です。

二．うちの学科のここがスゴイ！

国文学と国語学と漢文学の三分野にわたって偏りなく学べるのがリキュラムが整ってるところです。一、二年生のうちから幅広く学ぶことになるので、狭義の日本文学に留まらず多くの視点を得ることができました。僕は国文学の分野を専攻するつもりですが、日本の文学を考えるときにも、漢文学の影響は大切ですし、国語学のテーマと強く関係する問題も出てきます。そうした場面でそれぞれの知見を有機的に結びつけながら学んでいくのはこの学科ならではと言っていいんじゃないかと思います。

三．学びを通して自分の中に起こった変化

今色んなところで、「当たり前を疑え」姿勢が重要視されていると思うんです。国文学科に入って、それが身につったなと思うんです。例えば古典が好きでよくあって、「方丈記」などが好きで読んでいたのですが、現代語訳や注釈にわんぶにだっこにしてあっていました。そのときはそこに書いてあることをそのまま受け取っていましたが、大学で授業でいろいろ教えられないことがあると分かりました。古文に出てくる単語ひとつとっても、書かれた時代に作品においてどんな使われ方をするか調べることで、より深い読解ができ、そんな風に当たり前を疑って手探り論証していくというのは、大学で学んで特に身につった能力なのかなと思います。

四．学びを今後の人生の中でどう活かす？

今この時代、社会に多くの文章が溢れているわけじゃないですか。生きているだけで次から次に文章でくるとこうか。雑弁な言説や、ことさらに正しさを主張する文章もあります。その意味で、批判的な能力をもって、疑いつつ自分なりに文章を選択して、理解して、身につけていく重要性は、この時代まずます高まっているように思うんです。僕が国文学科でしてきた学びはそうした能力と直結するんじゃないかなと思うので、それを活かしていきたいです。多くの言説で溢れる時代だからこそ、それらに批判的になって、自分自身が見つめ直すような姿勢を大事にしたいと思っています。

Genjitsu Literature Fresh Literature Journal Literature Fiction Poetry Literature Fiction Poetry Literature Fiction Poetry